関西自然保護機構会報17(1):75－76，1995

書　評

「赤の女王」性と人の進化：マット・リドレー著，長谷川真理子訳（翔泳社）

大阪市立大学理学部　山　岸　　哲

10年以上前のことだ。アメリカから来た動物生態学者と，行動に関する進化の話をしていたとき，「赤の女王」仮説の話が出た。この仮説が流行しはじめた頃だったので，私の語学力で，それがルーイス・キャロルの童話『鏡の国のアリス』に出てくる話だということを聞き出すにはかなり苦労した。ところが，そこまでわかっても，恥をさらすようだが，その童話を読んでいなかったので，私はその仮説の内容を理解することが出来なかったのだ。このことに限らず，行動生態学の分野では「ギリシャ神話」や「マザーグース」や「聖書」の話がよく引き合いに出される。むこうでは，「桃太郎」や「舌切りスズメ」のお話と同じくらい人口にかいしゃしているのだろうが，日本の，特に理系の研究者にとっては文学の原典を読んでいないと少々つらいこともある。

本書を手にしたとき，まずはこの苦い思い出がよみがえった。国際的に恥をかいて以来，『鏡の国のアリス』も無理をして読んだので，今では，「赤の女王」が行動の進化で，どのような意味をもっているのかを，昔から知っていたような顔をして学生に講義することもできるし，この概念が一般書としてこうして世に出ていく時代なのかとある種の感慨さえ覚える。『鏡の国のアリス』の話は次のようなものだ。

> いちばん不思議だったのは，回りの木やなんかが，全然その位置を変えないことでした。どんなに早く走って行っても，何かを通り越すということは全くないようでした。「みんな，わたしたちといっしょに動いてくるのかしら？」とアリスはすっかりめんくらってしまって，考えました。女王にはアリスの考えがわかったと見えて，こう叫びました，「もっと早く！おしゃべりなどしようとせずに！」アリスはおしゃべりしようなんて考えたわけではありません。二度ともう口などきけないだろうと思ったくらい，息を切らしていました。だのに，女王はなおも，「もっと早く！もっと早く！」と叫んでアリスを引っぱって行くのでした。（角川文庫，岡田忠軒訳）

これはちょうど，平行して同方向に同じスピードで走る列車の一方から相手を見ると，あたかも止まっているように見え，これを追い越すには相手の列車より早く走らなけれがならないといった状況である。これが行動生態学での「赤の女王」仮説の概要であり，ある動物（個体）が何らかの進化を始めると，それに関わりのある他の動物（個体）も対抗的に進化し，限りない進化競争が続くという仮説である。

著者のマット・リドレーは行動生態学のメッカ，オックスフォード大学で動物学を学び，アメリカにわたってサイエンス・ジャーナリストとして成功した人である。彼は人間の本性，特に性にまつわる事象を大胆かつ単純（？）に，トリやサルや魚の行動を外延して説明してみせる。もちろん，そ

の根底には，動物（人間も含む）の行動は遺伝子によって支配されているという行動生態学のドグマがあり，一夫一妻制も男と女の果てしない進化競争（性の駆け引き）の妥協の産物であると断言する。ただし，「科学的に現象を説明することと，その現象を肯定することとは別である」と，繰り返し言い訳を付け加えることも忘れない。『ヒトに浮気・不倫は普通の現象であり，珍しいものではない。それにはかくかくの生物学的基盤があるのだ（本書のほとんどは，その例を説明するのに費やされるのだが)。しかし，こう書いたからといって私（著者）が不倫を肯定しているわけではない』と著者は言いたいらしいが，少なくともヒトの性戦略に関しては，事実としてそうなのかどうかを，もう少し慎重に考えるべきではないだろうか。彼の言い訳の仕方に，彼のジャーナリストとしての面目が躍如としているが，我々が科学者としてこの手の本を書くときには，こうは単純にはいかないのではないかと自問してしまう（我国には，科学者を装った書き手による類書が散見されるが)。

彼の視点は一貫して行動の進化競争にあり，その面では単純明快ですらある。そして，その明快さが本書の大きな魅力であるかもしれないが，訳者もあとがきの中で述べているように，この単純明快さをどのように評価するかが読者に課せられた大きな宿題であろう。行動生態学の旗手ともいえる，『利己的遺伝子』の著者リチャード・ドーキンスは，本書を評して，著者が「政治的正当さ」にこだわらずにはっきりものを言っているところがよい，としたそうだが，はたしてそんなに手放して褒めて良いのだろうか。著者がヒトの行動の文化的側面を余りに軽視しすぎてはいないかと心配になるからである。

訳者の長谷川真理子氏は日本動物行動学会の副会長に昨年就任され，「動物の性淘汰」に関して世界でも一線の研究者である。本書は最適の訳者を得て完ぺきに訳出されており，日本語も大変読みやすい。